

持続可能な未来への道

メーカー各社 SDGs の取り組み

Vol.03

河村電器産業株式会社

今や、企業の共通言語となりつつあるSDGs。とりわけ、電設資材メーカーとの親和性は高く、2030年までに達成することを目指すSDGs17目標のうち「07:エネルギーをみんなにそしてクリーンに」「08:働きがいも経済成長も」「09:産業と技術革新の基盤をつくる」「11:住み続けられるまちづくりを」「12:つくる責任 つかう責任」「13:気候変動に具体的な対策を」などは、電設資材メーカーの企業活動そのものとも言えます。



そこで、全日電材連賛助会員の電設資材メーカー各社を順番に訪問し、その先進的な取り組みをご紹介します。

河村電器産業株式会社

本 社 所 在 地：愛知県瀬戸市曙町 3 番 86

創 立：1919 年（大正 8 年）8 月

代表取締役社長：水野一隆

従 業 員 数：1995 名（連結、2024 年 3 月 31 日現在）

事 業 内 容：産業用、民生用電気機器製造販売

H P：<https://www.kawamura.co.jp/>



沿革

1919年	河村鈴吉の個人経営による河村製陶所として創業
1929年	合資会社河村商店設立。カットアウトスイッチ、カウンターウエイトなどの屋内配線器具の製造を開始
1945年	終戦と同時に製造部門を再開し「復興は先ず電気より」のスローガンを掲げ、本格的に電気配線器具の製造・販売を開始
1960年	業界に先駆けてホーム分電盤を開発・販売
1967年	会社組織を株式会社に改め河村電器産業株式会社となる
1969年	キュービクル式高圧受電設備の製造開始
1988年	コンポーネント構造による分電盤の標準化に成功
1992年	本社・研究開発棟竣工
1996年	上海捷有電子有限公司を設立
1997年	システムラックの製造開始
2001年	電力監視モニターの製造開始
2006年	プレトラックコンセントの製造開始
2010年	業界最薄ブレードブレーカ搭載「enステーション」の製造開始
2017年	ホーム分電盤が建築設備技術遺産に登録
2018年	宅配ロッカーBIZBO発売

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



カーボンニュートラルに 軸足を置いた製品開発



第3回の訪問メーカー様は愛知県瀬戸市に本社を構える河村電器産業株式会社様。
本社ショールームにおいて、水野一隆 代表取締役社長にお話を伺いました。
(文中での敬称は略させていただきます。)



水野一隆
代表取締役社長

小林勇斗
開発営業部
CN 事業開発グループ
ソリューション開発 3 課

櫻井理玖
商品開発部
商品マーケティンググループ
改善推進チーム

■SDGsに取り組みきつかけ

編集部 まずは、SDGsに取り

組むようになったきっかけを教えてくださいますか。

水野 当社では、全社を挙げて

目標に向かって取り組むというより、事業毎にSDGsを意識して事業活動を進めていくというスタンスをとっています。

当社は、電気インフラの中でも、電気エネルギーを測定・監視・制御という形で安心・安全に効率よく使う配電盤事業、



つまり電気エネルギーが供給されてから消費されるまでの間を事業領域として長年携わってきました。

数年前にSDGsが叫ばれ、カーボンニュートラルや地球環境問題をテーマにした国の政策が次々に出されるに及び、電気エネルギーが供給された後のことを事業領域としているだけで本当にいいのかという思いが、電気インフラに携わる者として、また会社を率いる立場として、自分自身に湧き上がってきました。

その頃、太陽光発電にしても、大規模なものだけでなく、オンサイトの自家消費型のものが注目され始めるなど、我々を取り巻く事業環境が地球環境問題を軸に大きく変化してきておりました。そのため、電気エネルギーが供給されるまでに関しても、事業領域に含めなければ、これからの企業の成長は見込めないと結論

に至りました。

では、何を成長エンジンにするかと考えた結果、それはカーボンニュートラルであり、カーボンニュートラルとSDGsは密接に絡み合っていることから、SDGsに取り組むこととなった訳です。

編集部 なるほど、河村電器産

業様の新たな成長エンジンとしてカーボンニュートラル(≠SDGs)があるわけですね。

水野 はい、今後の製品開発は全

てカーボンニュートラル(≠SDGs)を意識しておこなっていく予定です。既に、EV充電器関連、省エネ制御関連、再生可能エネルギーの導入ソリューションの分野でプロジェクトを組んで進めています。

例えば、EV充電器に関しては、EVに安全に効率よく電気エネルギーを供給するという捉え方ではこれまでの事業と変わりありませんが、効率的だけでなく継続的にエネル

ギーを供給するという捉え方をすれば、EVは走る蓄電池でもありますから、太陽光発電電力の利用も可能です。その太陽光発電や家庭用蓄電池、商用電源とEV充電器を最適に組み合わせることで継続的、効率的にエネルギーを供給することが出来、カーボンニュートラルに繋がります。

このたび、JAXA(はやぶさ)様と共同で開発した「way EV(ウェイブ)」は、限られた容量の電力をシェアして、何台も「ゼロ充電」なしで同時に充電可能なEV充電システムです。近い将来、EVが普及した際には、カーボンニュートラルに大きく貢献できるものと考えています。

■SDGsを徹底追及した

郡山新工場

編集部 製品以外でのSDGsの

取り組みいかがでしょう。



水野 今年の4月に稼働を開始した郡山工場（福島県郡山市）では、使用電力を100%再生可能エネルギーで賄っており、RE100（再生可能エネルギー100）を達成しています。

また、サステナビリティの観点から、震災が起った際に、周辺地域の防災拠点の役割を果たすよう、EV充電器の無料開放、避難所としての利用、停電地区へのEVによる電気

の運搬などを実施できるインフラを整備し、郡山市とは防災協定を締結しています。

さらに、DX（デジタルトランスフォーメーション）を利用した革新的工場とするべく、工程のモニタリングをはじめ、工程の自動化、副資材のピッキング方法の効率化を実現し、大幅な生産効率化を図っています。

編集部

非常に多岐にわたりSDGsに当てはまる取り組みを

されていることに驚きました。

水野 郡山工場はSDGsを徹底及した工場と言っても良いかもしれません。

そもそも、工場を福島県に新設したのも、雇用を含め、本来の意味で東日本大震災の復興支援をしたいという思いがあり、以前から決めていたことです。

また、工場はもととあった里山を切り開いて造成した工業団地にあるのですが、厚生棟が建つ場所には盛り土をした上で周囲には地域の樹木を植栽し、四季折々の環境を楽しめるよう整備しています。

■女性活躍の推進

編集部 前回の取材では、女性活躍の推進に力を入れているというお話を聞きましたが、現状について教えていただけますか。

水野 当社の河村会長が働き方

改革委員会の委員長となり進めており、女性が働きやすい環境づくりについては、どこにも負けないくらい整えてきたと自負しています。

一方で、環境を整えただけでは、なかなか周りに浸透しづらいということもわかり、次の段階として、浸透させるための様々なアプローチ方法を試行錯誤しながら取り組んでいるところです。実際、当社ブレイカー工場の工場長は女性ですし、iPadを使った営業で成果を上げる女性営業マンなど成功事例がいくつが出てきており、手ごたえを感じています。

ただ、ベースとなる※女性社員の数自体がまだまだ少なく、今後、女性社員比率をより高めていくことで、スポットライトを浴びる女性の数を増やしていきたいと考えています。

※新卒採用における女性社員目標比率…30%

■SDGs達成に向けての将来展望と課題

編集部 SDGs達成に向けての課題といますと。

水野 これまで普通にあった製品やサービスを、全て環境を意識したものに変わっていくためにはなりませんから、課題だらけです。

また、当社の取組みを対外的に知ってもらうにはどういう見せ方が適しているのか、同時に対外的だけでなく社内への浸透も課題だと考えています。

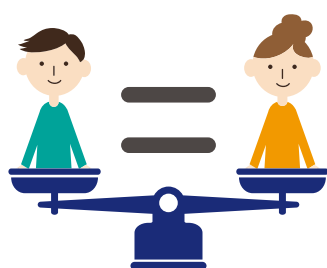
編集部 将来的なSDGsの取り組みの展望をお聞かせいただけますか。

水野 製品開発については新しい成長エンジン（カーボンニュートラル）に軸足を置いたものにしていくことはもちろん、既存製品についても環境に配慮したモノづくりを実施していきます。

す。

しかしながら、カーボンニュートラルについては、始めたばかりの事業領域ですから、情報が不足しております。大学や研究機関、電材商社様とアライアンスを組み、ご支援いただきながら進めていく必要があると考えています。

また、社会貢献については、今回の郡山工場開設を通して、地域の自治体と協力してできることが沢山あるということがわかりました。今後、生産拠点があるエリアを中心に、自治体や関係団体と協力して社会貢献を目的とした活動を推進していきます。





SDGs

いちおし

商品



『wayEV (ウェイブ)』

「EV充電に、もっと便利と安心を」をコンセプトに普通充電器のラインナップを取り揃えています。

EVコンボシリーズとして、EVコンセントからJAXA(はやぶさ)の電力制御システムを融合させた近未来向け普通充電器を製品化しています。

特に、電力制御システム『wayEV(ウェイブ)』では、複数台車両の充電の際に課題であった、後続充電車両の「ゼロ充電」を防ぎます。



■SDGs 商材を拡販するために電材卸会社へのお願い

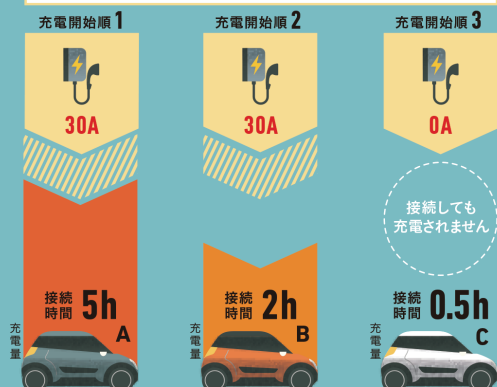
共販企業様とのアライアンスのきっかけづくりをご支援いただきたいと考えています。

機器単体での製品販売ではなく、設計／施工／メンテ／システム／サービスといったお客様に必要な要素をワンストップで可能にする仕組みづくりを一緒に検討させて下さい。

■従来型充電システムの場合

接続した順番で充電

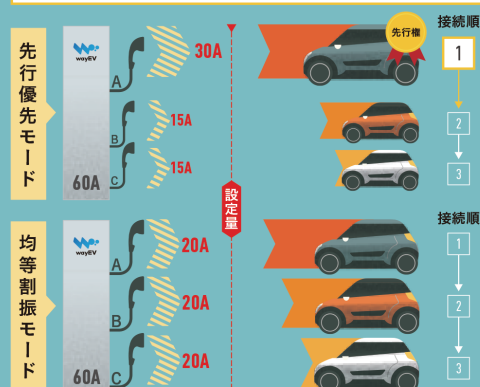
後から接続した車は充電自体ができない場合がある



■wayEVの場合

制御条件に基づく優先順位に応じて充電

一定距離を走れる量まで優先して充電する



比較条件: 充電器の充電総容量: 60A (200V) / 充電器の充電電流値: 30Aの場合

会社のお宝

ご紹介



河村電器産業株式会社は、1960年に業界に先駆けてホーム分電盤を開発しました。1961年に発売した「ホーム分電函（盤）（BBK-3）」は一般社団法人建築設備技術者協会（JABME）の建築設備技術遺産にも認定されています。

電気の安心・安全

建築設備技術遺産 認定品


建築設備技術遺産認定証
COMPANY OF THE JABME (JAPANESE ASSOCIATION OF BUILDING EQUIPMENT TECHNOLOGISTS)
建築設備技術遺産 第29号
ホーム分電函 (BBK-3)
建築設備技術遺産の歴史を伝える資料としてここに認定する
平成29年6月23日
一般社団法人 建築設備技術者協会
代表取締役 野村達

認定第 29 号

ホーム分電函 (BBK-3)

「建築設備技術遺産」とは、建築設備における空調、衛生、電気、搬送の4領域に関する技術と技術者の歴史的な足跡を示す事物・資料であり、建築設備技術の進歩、発展において重要な成果を示したものの、また、生活、経済、社会、地球環境、技術教育に貢献した、または当時を反映する建築設備技術をいいます。

分電盤の誕生



ホーム分電函 1961

鉄加工技術の応用

ボックス



1961

キュービクル・

ブレーカ

ホーム分電盤

分電盤

キャビネット